

西日本諸方言アスペクトの捉え方 —宮崎県方言を例にして—

津田 智史

キーワード：宮崎県方言、アスペクト、ヨルとトル、目撃、客観的事実

要旨

西日本諸方言アスペクトの捉え方について、宮崎県延岡市若年層のアスペクトをもとにヨル・トルの使用の違いについてみてみると、目撃や経験など主観的に表現する場合はヨル形が使用され、客観的に事実を述べる場合にトル形が使用されることがわかる。これは、談話資料の表現を抜き出しても同じような結果となる。また、ヨル・トルの形式自体は、目撃などの主観と客観的事実との区別に使用されるものであり、アスペクトの意味は発話状況や副詞との関わりによって決められることもみえてくる。

1. はじめに

西日本諸方言のアスペクト表現で問題になるのは、動詞の表す局面をヨル形で表すのか、トル形で表すのかということであろう。一般に、ヨル形が進行相を表わし、トル形が完了相を表すと広く知られているが、近年多くの報告がなされているように、西日本の各地方言でトル形が進行相の場面でも使用されていることも事実である。これはトル形の表す意味が拡大しているために、西日本の各地で起こっている現象であるという。しかし、これは本当にトル形の意味の拡大なのであるのか。

ことばが効率化を求め、よりシンプルな体系へと簡略化していくことは多々あるであろう。しかし、二階堂（2006）や、津田（2008）の報告であるように、アスペクト表現に関しては、面接調査でトル形が隆盛を見せる反面、談話中ではヨル形の使用も多く確認できる。つまり、これまでの面接結果だけではみえない使い分けがそこにあり、それによって自然談話の中ではヨル形とトル形が使い分けられていると言えそうである。

本稿では、宮崎県の北端、延岡市の若年層におけるアスペクト表現を例にして、ヨル・トルの使い分けについて検討していく。また、この調査で得られた結果の検

証のため、日本放送協会（以下、NHK）編（1981）の談話資料を利用し、西日本諸方言アスペクトの捉え方について考察する。

2. 宮崎県のアスペクト概観

宮崎県のアスペクト表現に関する報告は少ないが、いくつか先行研究を挙げながら概観する。『方言文法全国地図』第4集198図「散っている（進行態）」をみると、ヨル形のチリヨルが全域で使用され、諸県地域にチリオルも若干みられる。また、トル形のチッチョルも全域で確認できる。

地域に特化した資料としては、椎葉村という宮崎県中央内陸部のものがある。

今現に桜の花が {チリオル／チッチョル} 進行相

桜の花が地面一面に {チッチョル} 完了相

—村上（1994）より

この例でもわかるように、「散る」という動詞において、進行相を表すものはヨル形でもトル形でも問題はないということである。さらに、岸江・石田（2003）には、以下のような記述がある。

進行態では宮崎県北部に広がるヨルはかつて全県下に広がっていたが、既然態のチョルと一体化していったものと考えられる。西日本諸方言にみられるヨル・トルがトルに一本化していく傾向と軌を一にしたものとみられよう。

そして、その傾向は概して県北部よりも諸県地方で早く進んだということができる。

しかし、これらのヨル・トルの混在を、単純にトル形への一本化と呼んでよいのであろうか。先に述べたように、談話ではヨル・トルの使い分けも各地域でみられるとの報告がある。ヨル・トルの混在は何らかの表現の違いがあるというように考えることはできはしないか。

3. 宮崎県延岡市アスペクト

3.1. 調査について

調査地点は宮崎県延岡市で、調査は2008年7月に話者宅で行った。面接質問形式で、録音も行った。話者は、延岡市生まれの23歳の女性を対象とした。ただし、話者本人に内省力があり、高年層と変わらない程度の表現を使用すると判断した。

調査は、①いくつかの動詞について「将然、進行、完了、反復習慣」での表現形式を調査するものと、②実際に各動詞にヨル・トルを承接する形式を並べて提示し、

意味やイメージする場面の違い、共起する副詞などを聞いたものの2種類を行った。

調査対象とした動詞は次の9語である。「降る、食べる、歩く、開ける、落ちる、行く、死ぬ、消える、持つ」である。前4つが継続動詞、後5つが瞬間動詞である。

3.2. 将然相と完了相

まず、比較的ヨル形とトル形が互いの干渉なく使用されるであろう将然相と完了相における結果をみていきたい。これらの場合では、それぞれについてより状況を細かく説明するために、「もうすぐーする、ーしそう、ーしようとしている」などの補助的な表現を付随した形式もみられる。

完了相では、すべての動詞でトル形が現れた。このことから、トル形が動詞の完了した状態を表すことは明白である。将然相では、ほぼすべての動詞からヨル形が確認できた。ヨル形がみられないのは、「降る・歩く」である。将然は動作に入る直前であるため、動詞によっては、「食べる」や「開ける」「落ちる」のように、主体が動き出した時点で、周囲の状況やその動詞への準備・移行段階の動作から、その動詞をある程度予測できる場合がある。逆に、「降る」の主語は無情（今回は「雨」）であり、いつ降り出すのかという明確な直前性を話者が判断し難いことで、ヨル形が使われづらいと考えられる。「歩く」の場合は、今回調査した他の動詞と違い、目の前に窓があり開けることが予想されたり、何か食べ物を持っていたりといった周辺状況とのかかわりが少ない。また、足を一步踏み出したからといって、歩くのか走るのかは見てみないとわからない。このような事情から、「歩く」についても将然の状況を判断することが難しく、アルクヤローというような曖昧な表現になっている。

将然相では、タベヨトシチョル、オチソーニナツチョルなどの形式もみられた。これらは、前部が同じ形式でも、後部形がシヨルというヨル形にならないという。すでに前の部分で「ーしようと／ーしそうに」という直前性を明示する表現があり、動作開始直前の状態に至っていると判断されるために、トル形が使用されるのであろう。ただし、将然相において、ヨル・トルのみの形式で答える場合、基本的にトル形が選ばれることはない。

3.3. 進行相

次に、進行相の結果をみると、ここにはヨル形とトル形と、両方が使用されている動詞が多い。瞬間動詞こそヨル形がほとんどであるが、継続動詞ではトル形

の出現が著しい。興味深いのは、自分を主語とした場合にはトル形を答え、自分以外の人を主語とした場合にはヨル形を答えたことである。これ自体は話者が回答する上で、自分で規則性を作った結果ともとれる。また、基本的にはヨル形もトル形も意識して使い分けず、その場の雰囲気が出てくるものとの内省がある。しかし、調査結果をみていくと、そうではないことがわかる。主語が自分以外になって目撃したことを強調すると、ヨル形が出現しやすいということが結果に出ているからである。例えば、「食べる」の進行相は以下のような質問文で聞いた。

Q. 今日は、家族みんなで一緒にご飯食べようと言っていたのに、帰ったらもう食べ始めています。それを見て、「あっ、食べている」という場合、「食べている」の部分をどう言いますか。

単純に「ご飯を今まさに食べている時、どう言いますか」などと、「今食べている」状況だけを提示して調査すると、タベヨルもタベ Chol も出てくるが、波線のついた部分を強調し、目前で起こっていることを発見するという場面を想起させるとヨル形の出現率が高くなるのである。これは、今回の調査からだけ言えることではない。例えば、加藤・松永編(2003)では「泳ぐ」という継続動詞に関して「魚が川で泳いでいる時、「魚が泳いでる」と言うのをどう言いますか」という質問で聞いている¹。この回答としては、オヨイヨルなどのトル形が主に答えられ、オヨギヨルといったヨル形の回答は少ない。これは、単に魚が泳いでいるという事実をどのように言うのか聞いているものであり、その場合トル形が選択されやすいといえる。一方で、同書の「降る」の項目で、「窓を開ければ雨が降っています。その時、雨がどうしていると言いますか」と、目撃とも事実ともとれる場合はフリヨルなどのヨル形の出現が増える。さらに目撃性を強調して提示すれば、ヨル形の回答が増えることが予想される。このように継続動詞では目撃性を強調すればヨル形が、事実を客観的に述べようとすればトル形が発現されやすい。

では、瞬間動詞の場合はどうであろうか。今回の調査結果から、瞬間動詞「行く」の場合も、同様の結果を得た。

Q. 父が母との待ち合わせに出かけました。父が出かけて少し経つと、母から電話がかかってきて、「お父さんは？」と聞かれました。それに答えて、「今、待ち合わせ場所に行っているところだよ。」というとき、「行っている」の部分

をどう言いますか。

進行相の状況を聞く、この質問ではイッチョルが出やすいものの、「自分も一緒にある場所に行っている(向かっている)場合」と指定し、お父さんが向かっている

る様子を目撃しているということを強調すると、お父さんはイキヨルとなりヨル形が出やすくなる。これは、行っているという事実はトル形で表わし、その場を目撃しているという制約がつくとヨル形で表わされるということである。

3.4. 反復習慣

習慣的な場面を聞いたものでも、ヨル形とトル形が両方ともみられる動詞が多い。

まず目につくのは、継続動詞の場合に、自分を主語にするとヨル形で表現されやすく、自分以外を主語にするとトル形で表現されやすいことである。これは、主語の人称との関係が進行相の場合と反対になっているが、日々の習慣という点にその不思議を解く鍵がありそうである。例えば、進行相で「食べている」ことを人に伝える場合、何かを実際に食べながら話す人は少なく、いったん食べる動作を事実として自分から切り離して話す場面が多く、トル形が選択されると考えられる。一方、反復習慣では食べることを日々続けていることは事実であり、経験である。長いスパンでの繰り返しの経験を話そうとすれば、その繰り返しの動作は反復的に目撃・経験していることになるので、ヨル形で言い表すことができる。つまり、経験的なことにもヨル形の使用は可能であるといえる。一方で、自分の習慣であれば、目撃したことがあるであろうが、他人の習慣を毎回目撃することは少ない。他人の習慣は、事実として捉える場合が多い。その点から、事実を客観的に述べるためにトル形が選択される。ただし、1人称でトル形が、2人称以上でヨル形が出ないというわけではない。自分の習慣を人に話す場合など、一般的事実として話すことは十分に考えられるし、ある人と自分の生活サイクルが合えば、その人の習慣について確信を持って言うこともできる。

しかし、継続動詞でも「開ける」の場合、主語の人称に関係なくトル形が出やすい。これは、この動詞類が、主体の動作と客体の起こす変化の2側面を表すことができるためと考えられる。進行相と同様にヨル形を目撃と捉えた場合、開けている動作に焦点を当てなければ言い表せない。習慣的には開けていることを目撃したりすることは難しく、むしろ、開けてある事実の方がとらえやすい。つまり、客体に焦点を当てることで開けてある事実を言いやすくなるため、トル形が選択されやすいのである。

瞬間動詞は、継続動詞と違い、一回的な意味の動詞であるため（一回の動作で何度も落ちたり、死んだりできないため）、習慣的な動きが捉えづらい。もうすでに完了した結果を繰り返していることを捉えるしかない。状態変化の「行く」など

の場合を除き、主語の人称などに左右されないのである。そのため、ここでは主に習慣が長期間（恒常的）であるか、短期間であるかを中心に調査した。すると、長期的な「毎日」がつくとヨル形を、短期間の「ここ2, 3日」がつくとトル形となる。前者の場合、動詞が繰り返して起こっていること認識していることを表わし、後者は、最近の情報を述べているにすぎないことになる。ただし、「ここ2, 3日ずっと」になると、動詞が完了して結果として「ずっと」動詞の意味が完了した状態が継続していることを表す。また、ここでも「毎日」起こっていることでも客観的に事実として話そうとするとトル形で表現される。つまり、習慣を表現する際に重要になるのも、進行相の場合と同じく、それが自分の目撃したこと、経験を以て話しているのか、客観的に事実のみを述べているのかということになる。

3.5. シヨルとシトルの意味の違い

この質問項目では、実際に話者に「フリヨルとフツ Chol」のように、それぞれの動詞に関し、ヨル・トル両方の形式を提示し、この2つにどのような違いを認めるか聞いた。なお、この調査の際には、話者の弟（15歳・高校生）にも参加していただき、どのような場面をイメージするのか話し合いながら答えていただいた。ここでは、主に共起する副詞に注目したい。

まず、「気づいたら」や「いつの間にか」がヨル形と共起すると、今まさに進行している状況の発見的な用法になる。例えば、継続動詞「降る」では、（雨が）フリヨラン？やフリヨルワーといった形で出てくる。進行相でトル形を使用しようとする場合、前から知っていたというイメージが強いため、降っていることを事前に知っていないと使用しづらい。進行相に限れば、トル形と「気づいたら」や「いつの間にか」は共起しづらい。しかし、完了相で、降り終わって地面が濡れているのを見て、「気づいたら／いつの間にか」フツ Cholワーと言う場合には使用できる²。この場合、降り終わっていることを明示する。このように、動詞の意味の一場面を切り取り発話する発見的な用法では、ヨル形とトル形を目撃と痕跡（事実）の対立で捉える。これは瞬間動詞「落ちる」の場合、オチ Chol というようにトル形が共起しやすいことからいえる。発見的用法では、瞬間動詞は進行相を捉えづらく、その動詞の表す意味が完了した事実でないと判断しにくいためである。

「まだ」は、タベョットー？などのヨル形と共起しやすい。これも、発見的な意味合いが強いための内省であろう。ただ、もしご飯を食べるのが遅い人がいて、ある程度食べ終わっていないのを予測していたら、進行相でもタベョット？になる

ことはある。

次に、「ずっと」はトル形と共起しやすい。ある期間を差し出し、その間の動詞の状態を表現するために、事実として捉えやすく、トル形で表現されやすい。もちろん、「ずっと」アルキヨルも言えるであろう。ただし、ヨル形と共起する場合には、「ずっと」歩いているのを見ている場合か、習慣的に歩いているのを見ている場合に限られる。また、瞬間動詞のトル形と共起する場合、完了状態の継続の意味に捉える。

3.6. 宮崎県延岡市方言のヨル・トルの意味

進行相を表す局面では確かに、ヨル形とトル形、両形式とも使用が確認できる。しかし、そこには明確な使い分けがあるようである。目の前で起こっていることなどにはヨル形が使われやすい。トル形については、事前に知っている、動詞を事実としてとらえることができる、完了しているなどの要因が挙げられるが、共通しているのは、動詞の表す意味が継続しているということであろう。ある動詞の動作・変化が開始されれば、未完了でも情報として知ることができ、それは完了として捉えることができる。また、完了していれば、なおさら事実として捉えられやすくなる。このように、動詞の表す意味が継続しているということが、トル形の使用条件となる。さらに言えば、ヨル・トルの形式自体は、目撃した情報なのか、継続する客観的事実なのかで区別されるものであり、動詞類と共起した副詞の兼ね合いなどによってアスペクトの意味が決定されているといえる。

形式	潜在的意味	アスペクトの意味
シヨル	(動作・変化の)目撃	将然、進行、反復習慣
シトル	事実	進行、完了、反復習慣

図1

今調査で得られた、各局面で使用できる形式は図1のようにまとめられる。これまでの、進行や完了を表す形式はどちらか、といった枠組みではなく、ヨル形とトル形で表すことのできるアスペクトの意味はなにか、という枠で考える必要がある。

4. 談話資料

ここまで、延岡市の若年層アスペクトからヨル形とトル形の表す意味についてみてきた。しかし、山口(1994)が「区別のあるものにとっては区別がないことが理解できず、区別のないものにとっては区別があることが理解できない」と述べるよ

うに、面接質問調査だけでは重要な点を見落とす場合がある。調査はある意図や枠組みを以て行われるためである。アスペクト調査でも、単に進行相の形式を聞いただけではヨル形もトル形も使用するという回答が出る。これは、質問する方が使い分けの区別をしっかりと理解できていない状態で調査しているということである。幸いにも今回は、ヨル形とトル形の区別に一步近づくことができたように思う。次に必要になるのは、この区別の基準が正しいかどうかの確認である。そこで、談話からの表現抜き出しと検討も必要になってくる。

ここでは、NHK 編（1981）に現れるアスペクト表現をもとに、3 章で得られたアスペクトの捉え方が宮崎県全体で通用するものか、また、それは世代差を越えて共通したものかを検証する。

NHK 編（1981）に収録されているのは、日南市飢肥町、東臼杵郡南方村（1955 年、延岡市南方となる）の 2 地点である。

では、まずヨル形のものから、その表わす状況などをみていきたい。NHK 編の談話でヨル形が使用されているものには、話し手、聞き手の経験を回想的に表現したもの、待遇的な表現を含むものがあつた。いくつか例をみながら用法と使用されている状況を確認する³。

- 1) カメギ イキオツタモンヂャカナ シェッキハラ
賃仕事に 行ったものですかね 節季などに。（飢肥町：392p）
- 2) フタツヂェ ニシュースンベツツ クイオライタ
ふたりで 2 升 3 合ずつ 食べておられた。（南方村：426p）

1)は、話し手が聞き手の経験したことについて尋ねる例である。ここでは、節季ごとに賃仕事に行っていたのですかという、相手の経験について話をしている。当時日常的に起こっていたことを、回想しながら聞いている。話し手が聞き手の立場に立ち、聞き手の経験に焦点を当て、ヨル形で表現されている。

また、話し手が互感を持って経験したことなどもヨル形で表すことができる。「イキヨツタツヂャゲナヂャネノ（行くものだったそうではないですか。南方村：415p）」という例のように、自分自身の直接的な経験でなくても、その当時周りがこの状況を知っていて、その話を聞いたことがあるという経験をもとにする場合も、回想のヨル形を使用できる。二階堂（2001）にも、「目撃していなくとも、進行中の動作であることが感覚として捉えられるなら」、ヨル形が使用されるとある。

2)は、「おられる」という敬意を含んでいる待遇的なものである。第 3 者に対する敬意を示したものであり、水運の話で、昔の船乗りはお米をよく食べたという内

容の話である。ここでヨル形が待遇的に使われているということは、客観的な社会的地位の差を反映しているという意味で客観的と思われるかもしれないが、方言では概して親疎の加減により待遇表現として用いることができる。2)の場合も、昔からある程度馴染みのある船頭に関しての待遇的な発話である。親疎は話題主との関係性に左右されるものであり話し手の直接的な経験ではないものの、相手との関係から主観的な感情で判断するものである。待遇的に親しい間柄ではヨル形がよく使われ、疎遠な相手や目下に能動的に使うことで相手を低くみることも可能になる。大阪を中心にみられる卑語のヨルも、相手との関係性から用いられる主観的な待遇表現の側面を持つといえるであろう。ここでは、「おられる」に対する「おる」から、ヨル形が卑語と捉えられるのではない。

談話中のヨル形に関して、従来のアスペクト研究では、シヨッタという形式の場合、それは過去の回想を表すといわれる。井上(2001)は、トル形への一本化の中で、シヨッタという形式が過去回想という限定的な用法で残っているとす。しかし、談話中に出てくるヨル形をみていけばわかるが、どれも自分の経験、もしくは、待遇的表現である。つまり、主観性の強い場合に限り使用されていることがわかる。

一方、トル形で表現されたものには、以下のようなものがある。どれも、意味内容を事実として捉えられることができるものばかりである。

- 3) ソレカリ モドット ヤガチャッタカリ ブリキヤガ
 それから (家に) 帰ると 間もなくだったから ブリキ屋が
 キチョックレチヨ
 来ていてくれてね。 (飢肥町: 381p)

- 4) マチコガレチョンナラ ヒョイトシチェト オモチネー
 待ちこがれているなら ひょっとしてと 思ってね、(南方村: 421p)

3)は、完了相を表す内容の例である。台風の時、家に帰るともうブリキ屋さんが修理のために来ていてくれていたという、その時点で完了していたという表現である。ここで、「わざわざ来てくれていた」というような申し訳なさが含まれると、キョッチクレチヨというようになるであろうが、ここではすでに来ていた事実を述べるものであるから、トル形が使用されている。

4)は、心理表現を表す表現である。船乗りの帰りを待ちこがれている心情を話している場面である。工藤(1995)では、この種の心理や知覚を表すものは、スル、シヨル、シトルの対立が中和するという。しかし、マチコガレヨルでは個人の感情が含まれるが、マチコガレトルは待ちこがれている事実を述べるものである。進行

相か完了相かという視点で考えるために、その境界が見えなくなる。

このように、談話で使用されているアスペクト形式をみても、ヨル形とトル形はしっかりとした区別を持って使い分けられている。ここでの話題は飢肥町の「台風の話」や南方村の「結婚の話」など、決まったテーマに沿って語ったものである。話者自身の経験や、昔の話も盛り込まれていることから、過去時制での発話が多い。過去の話をする場合、延岡市調査の進行相でみられたような自分の行動をトル形で表すことは少なくなる。なぜなら、すでにそれぞれの動作が完了している場合がほとんどであるため、過去のなんらかの動作の途中を話す場合、自分の行っていた動作を強調すればヨル形が使用されやすい。以下をみていただきたい。

a) 昨日、ご飯食ベヨル／食ベトッタときに、友達から電話あったんだ。

b) 昨日、ご飯食ベトル／食ベトッタときに、友達から電話あったんだ。

西日本出身の筆者の内省では、a)の方では、「食べているときに電話がかかってきた」ことを話題としており、自分が食べている最中ということに焦点がある。自分の直接的動作の経験中ということを強調している。b)では、「食べているときに電話がかかってきた」という事実のみを伝え、そこからさらに話が展開していく印象を与える。これは、たまたまその時に電話があった事実を述べているにすぎない。つまり、談話中のヨル・トルの使用状況をみると、目撃したことや経験したことを強調すればヨル形を使用し、さらに、それは親疎を含む待遇表現でも使用されやすく、総じて主観的な表現をするときにヨル形を使用しやすいといえる。しかし、事実を述べる場合のように、話の焦点がアスペクト形式を承接した動詞から移っていくと、トル形を使用する傾向にある。ここまで自然談話をみてきたが、基本的にはヨル・トルとも現在時制での目撃／事実の使い分けがそのまま過去時制でも適用されているといえる。

5. アスペクトの捉え方

これまでのアスペクト研究では、重要となるのは進行か完了かという点であったが、どうやら宮崎県方言では、目撃か事実かが使い分けの争点になる。目撃していることが重要であればヨル形が、客観的に事実を述べるのであればトル形が使用されやすいのである。さらに、トル形は動詞の意味が継続しているという事実を表すことができることから、潜在的に進行相と完了相のどちらでも使用が可能であることがわかる。現在、西日本各地でトル形への一本化が叫ばれているが、ヨル・トルの併用が進行相でみられるのは、実は、調査する際に話者が持つ区別とは別の、違

った尺度の枠組みに回答をはめ込もうとしたために起こったものと考えられる。ヨル・トルがアスペクトの意味を表すのではなく、周辺の副詞や状況との呼応によってアスペクトの意味が与えられるといえる。

また、二階堂(2001)には、大分県方言では「目の前で進行中の出来事は必ずヨル形で表現する」という記述があり、今回の結果と重なるものといえる。丹羽(2005)にも、岐阜県土岐市や愛知県犬山市方言では、客観的な知識ではトル形を使って表現するが、目撃したり事実を確認するとヨル形で表現されるとある。このことから、目撃することがヨル形で表現することの重要な点になることは、西日本のかなり広い地域での傾向といえることができる。

6. おわりに

宮崎県延岡市の若年層アスペクトと、NHK 編の談話資料から、宮崎県におけるヨル・トルの表す意味と、アスペクトの捉え方をみてきた。そこから、進行と完了という枠組みは、一見するとヨル・トルの役割であるかのようであったが、トル形が意味を拡大し、将来的にトル形に一本化されるという傾向は、今回の宮崎県方言からは確認できない。実際には、当該方言では、目撃・経験情報を伝えるか、客観的に事実を伝えるかでヨル・トルは使い分けられている。また、いくつかの先行研究より、この傾向は西日本の各地でも確認できることがわかる。これまでのアスペクト研究の枠組みを見直す必要があるであろう。

課題として、現在の西日本諸方言におけるトル形への一本化を後押しするものとして、広く日本各地方言を網羅している工藤編(2001)がある。しかし、この結果からはヨル形が目撃を、トル形が事実の述べる場合に使用されているという違いはみえてこない。これは、各地調査を多くの調査員が行っていることに問題があると思われる。調査文は同じでも、目撃性に重点を置いて聞くかどうかまで調査員の共通理解ができていたのかの判断は難しい。そのために、いろいろな状況でヨル・トルが併用されたり、トル形が目立ったりといった結果が現れたものと考えられる。今後は、今回の結果にあるように、目撃する場合と客観的に事実を捉える場合という状況設定を組み込んだ、より詳しい記述調査が求められる。これは宮崎県方言にとどまらず、西日本各地方言についても同様の枠組みで研究を広げていきたい。

注

1. 加藤・松永編(2003)に載せられている、野尻町、綾町、西米良村における調査データに

よる。

2. ただし、完了相ではフットッタチャーという形式で表現しやすく、降っていたことを過去で捉える表現が一般的である。
3. 基本的には NHK 編 (1981) のカタカナ・標準語訳のテキストを原文のままを載せたが、一部、言いさしや注記など (括弧書きの相槌など) は削除した部分もある。

参考文献

- 井上文子 2001 「ことばの中の時間の意識—方言「一ヨッタ」の析出を通して—」『日本語学』20 (7)
- 加藤正信・松永修一編 2003 『宮崎方言における世代差・地域差の研究』淑徳大学国際コミュニケーション学部
- 岸江信介・石田祐子 2003 「日向・薩摩両方言接触地域における方言の動向—野尻町・綾町・西米良村方言を中心として—」加藤正信・松永修一編『宮崎方言における世代差・地域差の研究』淑徳大学国際コミュニケーション学部
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美編 2000 「東西調査第一次データ」『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書 2 大阪大学文学研究科
- 津田智史 2008 「徳島県のアスペクト表現の研究—談話資料からみえてくる課題—」徳島大学大学院 平成 19 年度修士論文
- 二階堂整 2001 「大分県のアスペクト」工藤真由美編『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書 2 大阪大学文学研究科
- 二階堂整 2006 「談話資料からみた福岡方言のアスペクトの実態」『語文研究』第 100・101 号 九州大学国語国文学会
- 日本放送協会編 1981 『方言全国談話資料 第 6 巻 九州編』日本放送協会出版
- 丹羽一彌 2005 『日本語動詞述語の構造』笠間書院
- 村上敬一 1994 「宮崎県東臼杵郡椎葉村方言のアスペクト」方言研究ゼミナール編『方言資料叢書 4 方言アスペクトの研究』広島大学教育学部国語教育研究所
- 山口幸洋 1994 「方言文法とくにテンス・アスペクトに関わる言語調査のあり方について」方言研究ゼミナール編『方言資料叢刊 第 4 巻 方言アスペクトの研究』広島大学教育学部国語教育研究所

—東北大学大学院生—